

～ セピア色の風景 ～

「たんすとお金」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

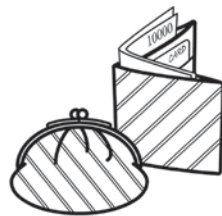
私は4人兄弟のバツチである。その頃、寝床では両親とすぐ上の兄と4人で寝ていた。その寝床の脇には、両親のたんすが並んで立っていた。親父のたんすは、一番上が引き戸、二段目が三つの引き出しが横に並んでいた。三段目以下は全幅の引き出しで、完全に振動だけでもカタカタと鳴る取っ手が付いていた。その並んだ三つの引き出しの一番右には、家計簿と財布

が入っていた。家計簿は「家の光」か何かの付録で、項目は親父がオリジナルに区分し直したものだ。当時、親父がお金に関して私ら子どもたちに言い渡していた言葉がある。「お金は、あの引き出しの財布にある。なんぼ持っていてもいいから、何に使ったか必ず家計簿に付けておけ。必要なお金は父ちゃんが出すから」。



とき、親にちゃんと説明できるかどうかを考へることを自然に覚えた。小さいときは、高くてあの引き出しには届かず、足

踏みミシンの腰掛けを持ってきた。その後、届くようになって、三つ大事に使うべき高額のお金であった。目の引き出しにあるお金は、



※1：関東北部～東北部地方の方言で「末っ子」を意味する単語
※2：一般社団法人家の光協会が発行している月刊誌。同協会はJAGグループの出版・文化事業を営んでいる

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める